

中等教育実習事後アンケートの分析にみる傾向と課題 —国語・書道・家庭科教諭志望学生のデータから—

大島 まな

九州女子大学人間科学部心理・文化学科 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2023年11月6日受付、2023年12月26日受理)

要 旨

教育実習は、「大学で学ぶ知識や理論」と「現場での実践」を結びつけ、学校教員としての資質を高める重要な役割を担っている。

九州女子大学の「中等教育実習」は、中学校教諭(国語・家庭)、高等学校教諭(国語・書道・家庭)の一種免許状取得を目指す学生が履修しており、筆者は「中等教育実習事前事後指導」を担当してきた。本論は、その事後指導時に毎年実施してきたアンケートの集積データを基に、中等教育学校(中学校・高等学校)における実習実態の一面を明らかにし、本学実習生の傾向や特徴、課題を見出すことを目的とするものである。その内容は、今後の教育実習指導に役立つ材料として活用されることが期待される。

キーワード：中等教育、教育実習、授業、生徒との関係、先生との関係

1. はじめに—背景と経緯—

教育実習は、教育職員免許法施行規則の規定¹⁾により、専門職としての教職を希望する学生が、大学で習得した知識・技能を踏まえて、学校現場での授業や学級経営などの教育活動を実際に体験し、学校で行われる教育活動全般に関する理解や児童生徒の理解、学校における人間関係の理解を深め、教育者に求められる自覚、指導技術等の専門的力量や実践力を身につける場である。すなわち、教育実習は、「大学で学ぶ知識や理論」と「現場での実践」を結びつけ、学校教員としての資質を高める重要な役割を担っている。

「教職課程コアカリキュラム」²⁾では、教育実習の全体目標を次のように示している。「教育実習は、観察・参加・実習という方法で教育実践に関わることを通して、教育者としての愛情と使命感を深め、将来教員になるうえでの能力や適性を考えるとともに課題を自覚する機会である。一定の実践的指導力を有する指導教員のもとで体験を積み、学校教育の実際を体験的・総合的に理解し、教育実践ならびに教育実践研究の基礎的な能力と態度を身に付ける。」ことが全体目標に掲げられている。

九州女子大学では、幼稚園教諭、小学校教諭、特別支援学校教諭、中学校教諭(国語・家庭)、高等学校教諭(国語・書道・家庭)、栄養教諭の一種免許状取得が可能である。教職課程を履修している学生たちは、教育実習で現場の先生の指導の下、児童生徒と実際に向き合い、自分自身の資質を確かめながら教職への意志を確認する貴重な機会として、緊張と不安を抱えながらも実習を楽しみにしている。

筆者は平成27年度より「中等教育実習事前事後指導」を担当している。教科指導の教員と組んで複数で担当しているが、特に教科以外の全体指導(教育実習の意義・目標、事前打ち合わせから終了後までの流れ、教員の職務と校務分掌および教育実習生の服務、実習関係書類・実習日誌の説明などを「教育実習の手引き」等を用いながら指導)を担当してきた。令和3年度までは人間科学部人間発達学科人間基礎学専攻(国語・書道)と家政学部人間生活学科(家庭)を一部合同で指導してきた(教科指導は学科別、全体指導を合同で実施)が、令和4年度以降はすべて学科ごとに実施するようになった。筆者の所属学科では、中学校・高等学校の国語と高等学校の書道の一種免許状取得を目指す学生たちが学んでいる。中等教育実習は、中学校は3週間、高等学校は2週間で、4年生前期に実施してきた(改組後は時期が変更されている)。

中等教育実習の事後指導時に、実習を終えた学生を対象に毎年「事後アンケート」を実施してきた。「中等教育実習事前事後指導」の前任者である福石賢一先生が実施されていたアンケート項目を引き継いだ形で継続して実施してきたものである。福石先生は事後アンケートの結果をデータにして翌年以降の学生たちに提示し、実習の事前指導に活用されていた。先輩たちの現場での体験を具体的に伝える教材であり、実習を

前にした学生にとっては、待ち受けていることをイメージしながら気持ちを引き締める契機にもなっていた。筆者はそれを引き継いで同じようにアンケートを実施、その結果を授業に活用してきたため数年間で一定数のデータが集まった。毎年の教職課程（中等教育）履修者は各学科10～20名規模であったために、単年度でのデータは標本数が十分ではないが、数年間分を集積してある程度評価できる数値になった。

本論は、このアンケート結果から、中等教育学校（中学校・高等学校）における実習実態の一面を明らかにし、本学で中学校教諭（国語・家庭）および高等学校教諭（国語・書道・家庭）を目指している学生たちの傾向や特徴、課題を見出すことを目的としている。そのことによって、今後の教育実習指導に役立つ材料としたい。

2. アンケート調査の概要と研究の方法

本論で分析するアンケート調査の概要は以下の通りである。

(1) 調査の目的

本学の中等教育課程履修学生たちの中等教育実習の実態と感想を把握することによって、教育実習に向き合う学生たちの傾向と課題を明らかにし、今後の実習指導に役立つための参考資料として実施したものである。また、前年度までの集計結果を事前指導の授業で学生たちに示すことによって、実習の具体的なイメージを描き、心構えと実習に臨む覚悟を確認する一助としているので、授業教材としても用いることを意図している。回答する学生たちには、次年度以降の指導のためにデータを集積して今後の授業で用いることを実施前に伝えている。

(2) 調査の年次と対象学生

学科と免許種、学年については、①人間科学部人間発達学科人間基礎学専攻において中学校教諭一種免許状（国語）・高等学校教諭一種免許状（国語・書道）取得を目指している4年生、②家政学部人間生活学科において中学校・高等学校教諭一種免許状（家庭）取得を目指している4年生を対象に実施した。

調査の年次および対象学生数（回収率）は、以下の通りである。

①平成29（2017）年度～令和4（2022）年度までの履修学生（国語・書道）119名中108名分を回収（回収率90.8%）

②平成29（2017）年度～令和3（2021）年度までの履修学生（家庭）66名中60名分を回収（回収率90.9%）

合計で、履修学生185名中168名分を回収（回収率90.8%）した。

近年の状況を把握するため、平成29年度以降の直近の集積データを用いる。ただし、令和2年度は、新型コロナウイルスの感染拡大のために教育実習が実施できずに代替プログラムを実施して対応した³⁾ことから、事後アンケートは実施していない。そのため、令和2年を除いた各年のデータを集積したものである。従って、①については5年間のデータである。②については、家政学部の実習指導（全体指導のみ）は令和3年度まで担当したが、令和4年度以降は担当ではなくなったため、令和2年度を除いた4年間のデータを蓄積したものである。

(3) 調査の方法

毎年、「中等教育実習事前事後指導」の事後指導の1コマ（12月）で質問紙を配付、その場でアンケートの趣旨を説明後記入してもらい回収した。無記名だが、学科名と教育実習の教科（国語・書道・家庭）は記入欄を設けている。無記名のため個人が特定されることはないこと、結果は統計的に処理されることを学生に伝えている。

(4) 調査項目の内容

設問は以下の6点である。

1) 教育実習中、授業以外にどのような活動内容の実習を体験しましたか。参加したものすべてに○をつけてください。（選択肢、複数回答）

2) 道徳、総合学習の時間はありましたか。（実習で関わりましたか。）（有無を選択）

（「道徳の時間」は平成27（2015）年度の学習指導要領一部改訂により「特別の教科 道徳」として教科となり、中学校では平成31（2019）年度より完全実施となっているが、ここでは「道徳」に統一して表記する。また、「総合的な学習の時間」は、高等学校では令和4（2022）年度から「総合的な探究の

時間」として実施されているが、ここでは「総合学習の時間」に統一して表記する。）

3) 授業で苦勞したことは何ですか。(上位3つまで選択、複数回答)

4) 生徒との関係で苦勞したことは何ですか。(上位2つまで選択、複数回答)

5) 先生との関係で苦勞したことは何ですか。(上位2つまで選択、複数回答)

6) 実習日誌について、改善したらよいと思うことを自由に書いてください。(自由記述)

(5) 平成26年以前のデータについて

前述した通り、アンケート調査の実施と質問紙の内容(設問項目)は「中等教育実習事前事後指導」の前任者である福石賢一先生から引き継いだものである。筆者が授業担当を引き継いだのが平成27年度からであったので、福石先生が授業で提示されたデータは平成26年以前の4年生のものである。本論では、平成26年以前(10年前と表記する)のデータを筆者が蓄積した近年のデータと一部比較するために用いる。データは実数ではなく、すべて割合(百分率)で示されている。

今回、質問紙および平成26年以前のデータを分析することについては、福石先生の了解を得ている。⁴⁾

(6) 研究の方法

近年の集積データについては、教科(「国語・書道」、「家庭」)ごとの数値と、教科別(学科別)の比較を行う。教育実習を書道で実施する学生は少数で、個別の分析をするだけの十分な数値ではないため、「国語・書道」を1つのグループとしてまとめて分析する。(「書道」の免許取得を目指している学生はほぼ全員が「国語」の免許も取得している。)

さらに、教科(学科)ごとに、平成26年以前(10年前)と近年の数値との比較を行う。

分析する設問項目について、上記「6) 実習日誌について」の回答は除外する。実習日誌についての回答は、毎年の実習日誌改訂の参考資料として使用しているため、本論では扱わない。

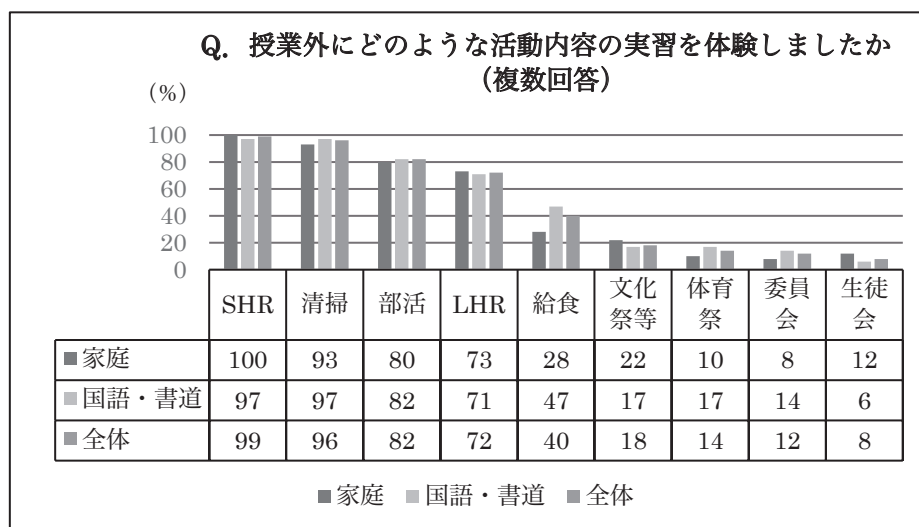
教科ごとに回答者の実数はかなり異なるため、集積した数値はすべて割合(百分率)で示す。傾向や特徴を把握できればよいので、小数点以下は四捨五入し切り捨てて表記する。

3. 調査結果

設問項目ごとの結果を以下に記す。

(1) 近年の集積結果

1) 「教育実習中、授業以外にどのような活動を体験したか」を尋ね、参加したものをすべて選択してもらった。選択肢は、「SHR(ショートホームルーム)、LHR(ロングホームルーム)、委員会、給食、清掃、体育祭(運動会)、文化祭等、部活(運動部、文化部)、生徒会、その他」である。教科ごと、全体の結果は、図表1の通りである。



図表1 授業外の活動

授業以外では、教科に関係なくどちらもSHR、掃除は9割以上と高い割合で関わっている。部活への関わりも教科に関係なく8割と高い。「書道」の実習生が書道部に関わる、「家庭」の実習生が家庭クラブ、料理部、食物研究部等に関わることが多いことを除いては、運動部（バレーボール、バスケットボール、テニス、卓球、陸上、剣道、サッカー等）、文化部（書道、吹奏楽、軽音楽、合唱、箏曲、演劇、美術、茶華道、家庭、料理、食物研究、手芸等）ともに多様な内容であった。給食は、「国語・書道」では5割で「家庭」より多くなっている。行事への関わりは、実習時期（5月頃）にも関連していると考えられる。「その他」は、活動の捉え方に幅があり記入に偏りがあったため（全く記載していない学生がいる一方、一人の学生が幾つも記入している等）、データでは示していないが、内容としては、登下校指導、挨拶運動、全校朝会、遠足、クラスマッチ、高校総体、交通安全教室、健康診断、進路指導等が挙げられていた。

2) 「道徳、総合学習の時間に実習で関わったかどうか」については、図2のような結果となった。

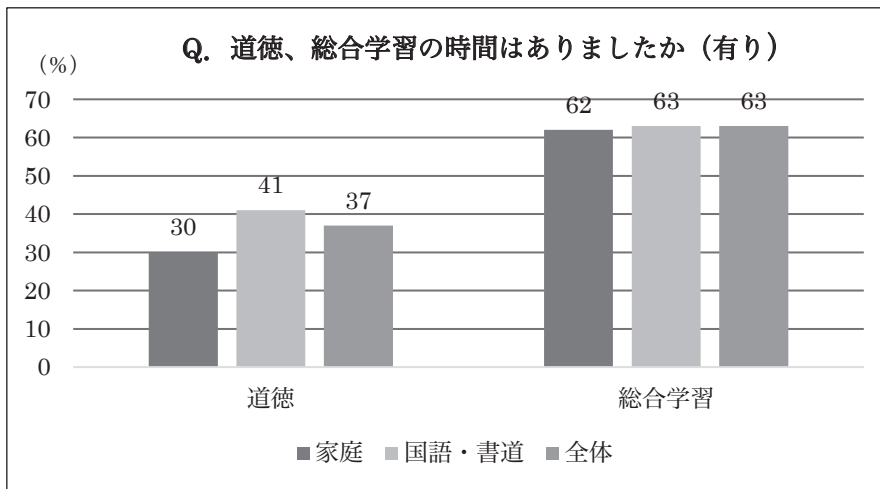
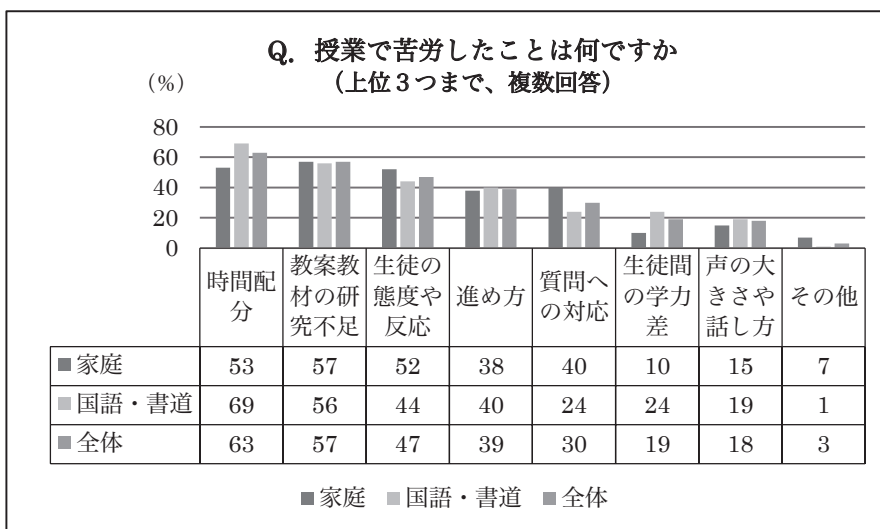


図2 道徳・総合学習の時間への関わり

道徳には、「家庭」で3割、「国語・書道」で4割が関わっている。総合学習には、どちらも約6割が関わっていることが分かる。

3) 「授業で苦労したこと」を上位3つまで選択してもらった結果は、図表3の通りである。

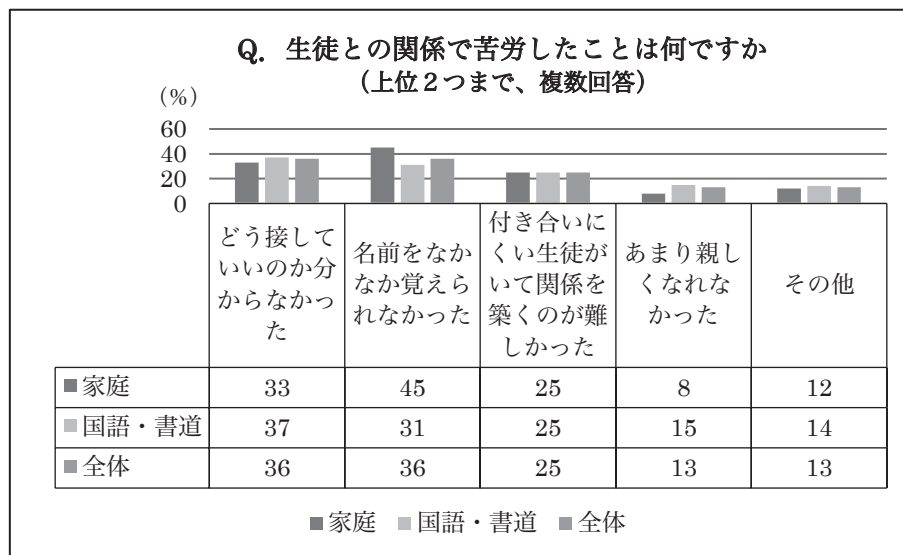


図表3 授業で苦労したこと

授業で苦労したことについては、「その他」を含めて8つの選択肢から上位3つまでを選択してもらった。上位3つをみると、「家庭」は「教案教材の研究不足」57%、「時間配分」53%、「生徒の態度や反応」52%と5割を超えて並んでいる。「国語・書道」では、「時間配分」69%とかなり高く、次いで「教案教材

の研究不足」56%、「生徒の態度や反応」44%となっている。「質問への対応」は「家庭」が4割である。「生徒間の学力差」は「国語・書道」24%が「家庭」10%の倍以上となっている。教科（国語）の特徴として、学力差がより明確になることが考えられる。「その他」には、「クラスの雰囲気の違い」、「板書計画」、「ICT環境が不十分」、「グループ活動の進め方」が挙げられている。

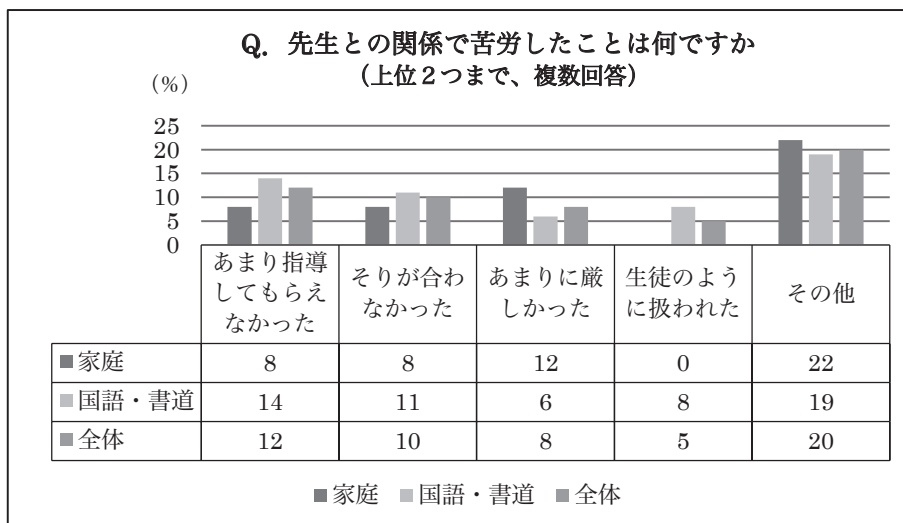
4) 「生徒との関係で苦労したこと」を上位2つまで選択してもらった結果は、図表4の通りである。



図表4 生徒との関係で苦労したこと

生徒との関係で苦労したことについては、「その他」を含めて5つの選択肢から上位2つまでを選択してもらった。上位2つをみると、「家庭」は「名前をなかなか覚えられなかった」45%、「どう接していいのかわからなかった」33%、「国語・書道」は、「どう接していいのかわからなかった」37%、「名前をなかなか覚えられなかった」31%となっている。「家庭」が名前をなかなか覚えられないという割合が少し高いのは、1週間の授業時数の違いが影響しているかもしれない。（家庭科は国語ほどコマ数が多くないため、同じクラスの生徒と顔を合わせる機会が限られる。）「その他」には、教科に関係なく「やる気がない・勉強が嫌いな生徒への対応」、「素行がよくない生徒への対応」、「あまり話さない生徒への対応」、「発達障害の子への接し方」、「ケンカが始まった時の対応」等が記されており、多様な苦労があったことがうかがえる。

5) 「先生との関係で苦労したこと」を上位2つまで選択してもらった結果は、図表5の通りである。



図表5 先生との関係で苦労したこと

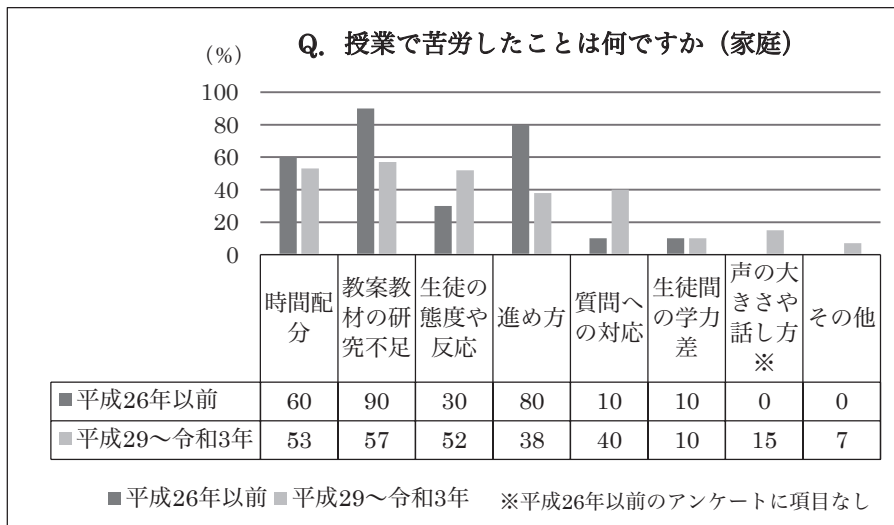
先生との関係で苦勞したことについては、「その他」を含めて5つの選択肢から上位2つまでを選択してもらった。全体としてはあまり高い数値ではないので、生徒との関係ほどは苦勞していないことがうかがわれる。「その他」を除き上位2つをみると、「家庭」は「あまりに厳しかった」12%、「あまり指導してもらえなかった」と「そりが合わなかった」が8%で並んでいる。「国語・書道」は、「あまり指導してもらえなかった」14%、「そりが合わなかった」11%となっている。「その他」がどちらの教科も2割程度となっているが、その内容は教科に関係なく、「先生が忙しそうで声をかけるタイミングが難しかった」、「先生が忙しく、打ち合わせる時間があまりなかった」等の教員の忙しい様子を表す記述が最も多かった。ほかに「先生ごとに対応が違ったのでどうしたらいいのか分からなかった」、「変更などの連絡や指示が直前にされるので対応できなかった」、「デリカシーのない発言をされた」等が挙げられている。

(2) 平成26年以前（10年前）と近年の比較

ここからは、平成26年以前のデータと上記のデータを並べて、10年前と近年の実習の状況や学生の感じ方を、教科「家庭」、「国語・書道」ごとに比較してみたい。

1) 「授業外の活動」および2) 「道徳・総合学習の時間への関わり」については、どの教科も10年前と近年の状況に変化はほとんど見られなかったため、データの提示は割愛する。

3)-1 「授業で苦勞したこと」（家庭）を10年前と近年で比較した結果は、図表6の通りである。

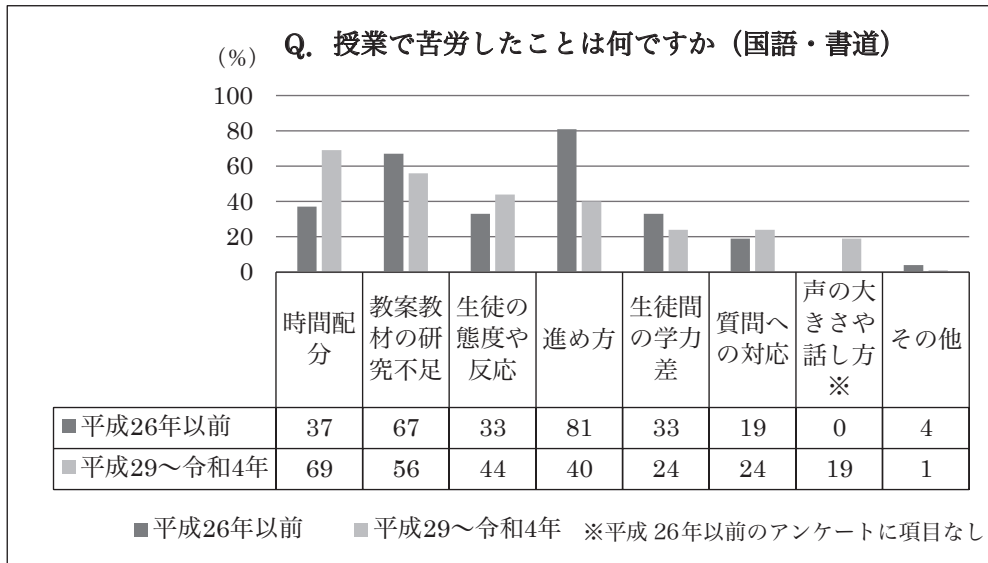


図表6 授業で苦勞したこと（家庭）10年前との比較

10年前では「教案教材の研究不足」90%、「進め方」80%、「時間配分」60%など教科指導の内容や方法に関する課題が主であるが、この3点は近年でかなり改善している。近年では「生徒の態度や反応」52%、「質問への対応」40%など授業中の生徒とのコミュニケーションに課題を感じている学生が以前より多くなっている。

なお、平成26年以前は「声の大きさや話し方」の選択肢はなかったが、実習日誌の記載内容に「大きな声が出なくて苦勞した」、「どのように話したらいいのか、言葉や表現が難しかった」というような記載が少なからず見られたため、平成29年度以降のアンケート調査では選択肢に加えたものである。近年で15%と多くはないが、6～7人に1人は苦勞していることが分かる。「学力差」は以前と近年で差はなく10%である。

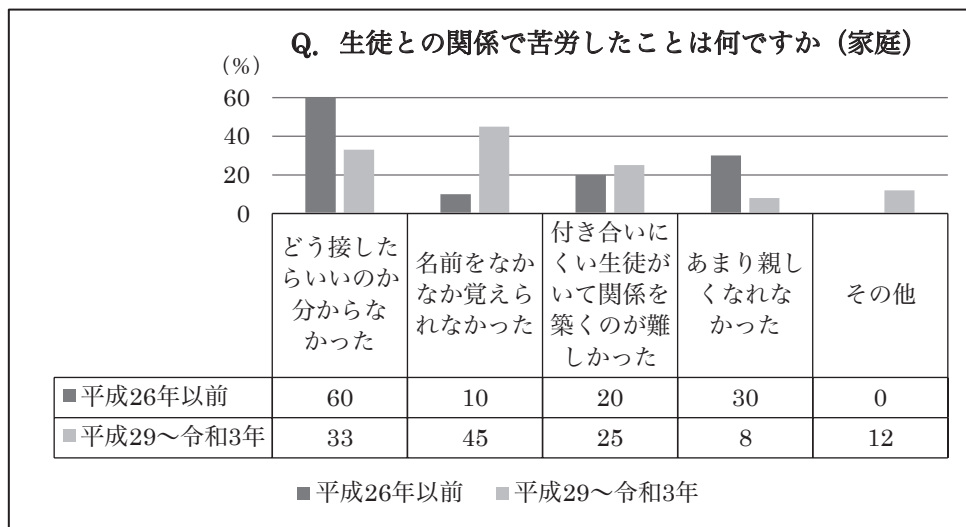
3)-2「授業で苦勞したこと」(国語・書道)を平成26年以前と近年で比較した結果は、図表7の通りである。



図表7 授業で苦勞したこと(国語・書道)10年前との比較

10年前では「進め方」が81%と多く、次いで「教案教材の研究不足」67%、「時間配分」37%となっている。近年では「時間配分」が69%と多く、次いで「教案教材の研究不足」56%、「生徒の態度や反応」44%となっている。「進め方」は以前より半減して40%となっている。「家庭」と同様、授業中の生徒とのコミュニケーションに課題を感じている学生は、10年前よりも多くなっている。また、「声の大きさや話し方」19%と「家庭」よりも少し多く5人に1人は苦勞していることが分かる。「学力差」は以前よりも若干少なくなっている。

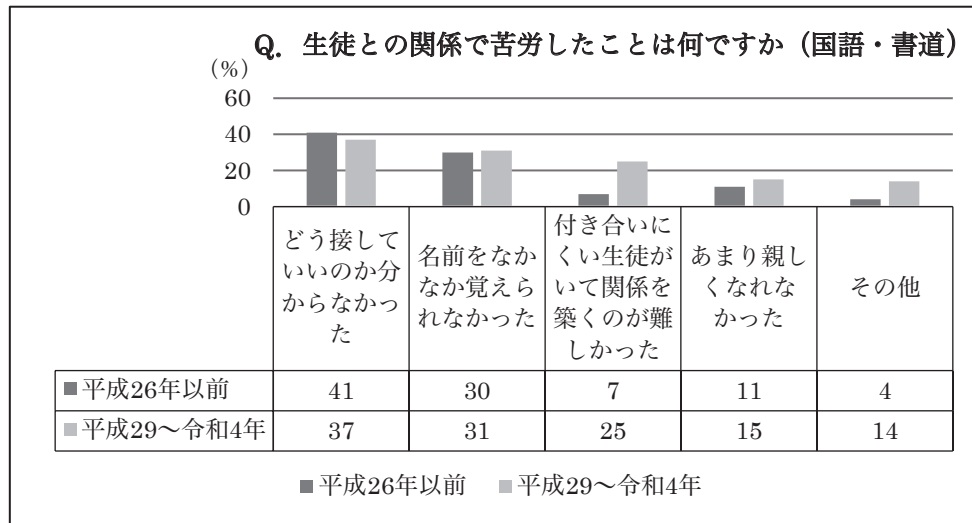
4)-1「生徒との関係で苦勞したこと」(家庭)を平成26年以前と近年で比較した結果は、図表8の通りである。



図表8 生徒との関係で苦勞したこと(家庭)10年前との比較

10年前では、「どう接したらいいのかわからなかった」60%と突出しており、次いで「あまり親しくなれなかった」30%となっている。「名前をなかなか覚えられなかった」は10%とそれほど多い訳ではない。近年では、最も多いのが「名前をなかなか覚えられなかった」45%である。次いで「どう接していいのかわからなかった」33%は10年前の約2分の1である。「あまり親しくなれなかった」もかなり減少している。

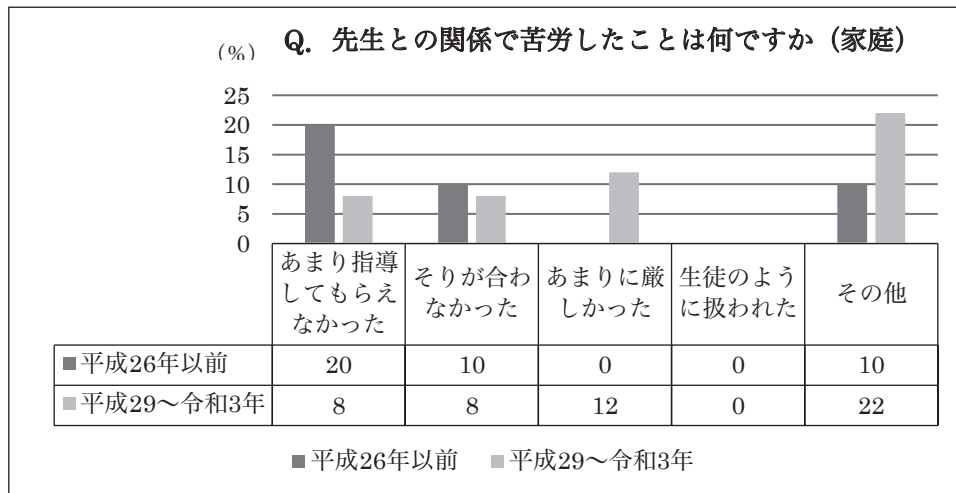
4)-2「生徒との関係で苦労したこと」（国語・書道）を平成26年以前と近年で比較した結果は、図表9の通りである。



図表9 生徒との関係で苦労したこと（国語・書道）10年前との比較

10年前も近年も、「どう接していいのかわからなかった」約4割、「名前をなかなか覚えられなかった」約3割の傾向は変わらない。しかしながら、「付き合いにくい生徒がいて関係を築くのが難しかった」が、10年前は7%であったのが近年では25%でかなり多くなっている。近年では「その他」も14%と増えていることから、前述したように、多様な生徒の実態が背景にあることが考えられる。

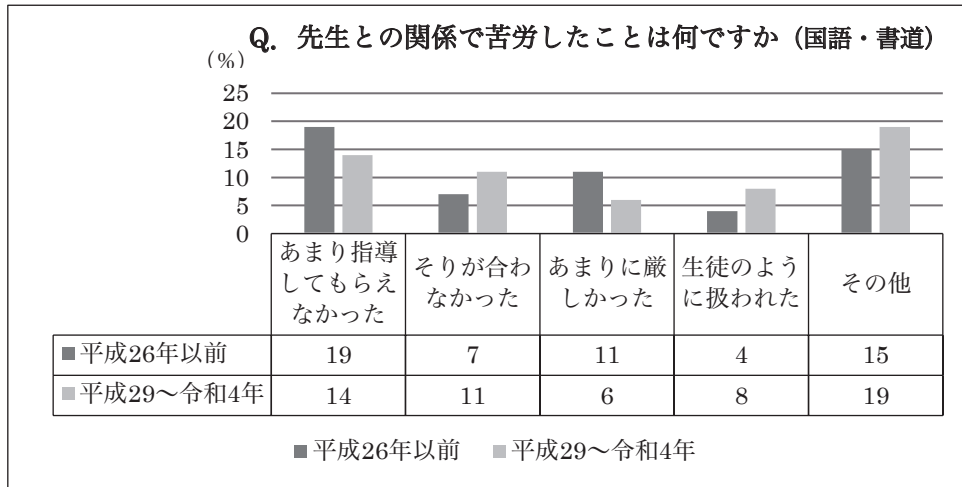
5)-1「先生との関係で苦労したこと」（家庭）を平成26年以前と近年で比較した結果は、図表10の通りである。



図表10 先生との関係で苦労したこと（家庭）10年前との比較

10年前では、「あまり指導してもらえなかった」20%が最も多いが、近年では8%とそれほど高くはない。ただし、近年では前述したように「その他」として、教員が多忙であるために「打ち合わせる時間があまりなかった」というような記述が多かったことを考えると、それが「あまり指導してもらえなかった」に結びつくことも考えられる。また、10年前では「あまりに厳しかった」はゼロであるが、近年では12%と増えている。

5)-2「先生との関係で苦勞したこと」（国語・書道）を平成26年以前と近年で比較した結果は、図表11の通りである。



図表11 先生との関係で苦勞したこと（国語・書道）10年前との比較

「あまり指導してもらえなかった」が10年前19%、近年14%でどちらも最も多い。しかし、「そりが合わなかった」が10年前7%、近年11%、また「生徒のように扱われた」が10年前4%、近年8%で若干増えている。反対に「あまりに厳しかった」は少し減っている。「その他」は10年前15%、近年19%で、以前から選択肢以外で多様な苦勞があることがうかがえる。

4. まとめと考察—今後の指導に向けて—

(1) 授業外の活動

教科や経年変化では特徴や傾向に大きな違いは見られなかったので、まとめて考察したい。

全体として、SHR、清掃にはほぼ全員が関わっていること、LHRも7割が関わっていることから、教科外であっても学級経営場面でほぼ関わる項目として、事前指導で心づもりをさせておくことが大切と思われる。特に、ホームルームで「話をする時間を与えられてとまどった」、「何を話したらよいのか話題を考えるのに苦勞した」という記述が実習日誌にも見られるため、普段から生徒に伝えたい話題、トピックなどを考えておくこと、そのための情報収集の必要性を早い段階で学生に伝えておくことよいか。

また、部活への関わりもかなりあった。部活動は教育課程外の活動であるものの、教育実習中の関わりは少なくないことが分かった。実習生自身の中学校・高等学校時代の部活経験によって関わりが期待されていることを事前に想定しておいた方がよいかと思う。ただ部活動については、教育課程外ということ consideringすれば、教育実習生が従事する業務として優先順位は高くないこと、また学校教員の負担を減らす動きとして地域への移行が検討されている⁵⁾ため、今後の変化には注目していく必要がある。

(2) 道徳、総合学習の時間への関わり

総合学習の時間には6割が関わっているため、事前打ち合わせ時に教科指導の情報だけでなく、実習校の当該学年では総合学習で何をテーマにしているのか等も担当教員に尋ねてみるとよいのではないだろうか。

道徳は3～4割で3人に1人は関わっているため、担当学年の道徳の教材などを見ておくと、実習中にとまどうことが少ないと思われる。

(3) 授業で苦勞したこと

「教案教材の研究不足」や「時間配分」、「進め方」は実習生にとって継続的かつ中心的な課題である。場を踏まなければ一朝一夕に力がつくものではないとしても、大学の模擬授業での実践、練習は役立つものであろう。「家庭」も「国語・書道」も「進め方」は10年前の半分以下に減少して大きく改善している。「家庭」は「教案教材の研究不足」もかなり改善していることが分かる。これらは大学の実習前指導における模擬授業の成果と言えるのではないだろうか。しかしながら「国語・書道」では「時間配分」に苦勞している学生が増えている。課題点を踏まえた教科の指導法に引き続き期待するところである。

気がかりなのは、近年の傾向として、「生徒の態度や反応」、「質問への対応」など授業中の生徒とのコミュニケーションに課題を感じている学生がどの教科でも10年前より増えていることである。(上記の傾向はコロナ禍以前からすでに表れている。)教材研究や指導案の書き方は大学でかなり学ぶことができるが、実際の中高生の質問や反応は、大学の模擬授業ではなかなか想像が難しいものであろう。むしろ、教育実習を、現実の中高生の質問を受けることができる貴重な機会、「生徒の態度や反応」を直に味わうことができる機会と前向きに捉えて、とまどうことを前提に心構えをしておくことも大切ではないだろうか。その上で、分からないこと、すぐに答えられないことにどのように対処するのか、シミュレーションしておくこと、現場の教員の対応を観察して学ぶこと、担当教員に相談すること等の対処法を示しておくことも有効かと思われる。大学生活においても、集団での討論やプレゼンテーションなどを通して、コミュニケーション力や表現力を培っておくことが以前より求められていると言えよう。

(4) 生徒との関係で苦勞したこと

「どう接していいのか分からなかった」は10年前と比べると、減少している。特に「家庭」では「どう接していいのか分からなかった」「あまり親しくなれなかった」がかなり減っており、生徒との関係づくりが改善している。しかしながらどちらの教科も「どう接していいのか分からなかった」実習生が3～4割はいる。これは、上記のコミュニケーション力の課題とも関連していることが想像される。

「名前をなかなか覚えられなかった」は「家庭」に多い傾向で、10年前はあまり多くなかったのに近年増えている。「技術・家庭」の授業時数は中学1・2年で年間70時間(学習指導要領)であり、「国語」140時間の半分となっている。そのため、(複数クラスを担当するとしても)一つのクラスの生徒と顔を合わせる回数がかかなり限定されることから、「国語」よりも生徒の顔と名前を覚えることは難しいことが考えられる。しかしながら、授業時数は10年前から変わっていないため、近年の学生が特に覚えられない理由は、今回のデータのみでは不明である。新型コロナウイルスの感染拡大による授業内容の制限(調理実習等の未実施や短時間での実施など)によって、生徒とじっくり関わる機会が減少していることも想定されるが、各年のデータを見ると、コロナ禍以前の平成29、30年度でもすでに同様の傾向が出ている。近年、個人情報保護の観点から名札を使用しない学校が増えていることも一因としてあるのではないか。名前を覚える工夫(休み時間や掃除時間の生徒との関わり方など)についてあらかじめ考えさせたい。

割合としては高くはないものの、「やる気がない生徒への対応」、「素行がよくない生徒への対応」、「発達障害の子への接し方」など多様な生徒の実態とその対応の苦勞がうかがわれる記述があった。現場の実態として伝えるとともに、教育実習生の手には余る問題、保護者との相談が必要な問題等も含まれるので、実習生だけで判断せず、担任に相談すること、一人で抱え込まないこと等を今以上に事前指導で伝えることも必要と思われる。

(5) 先生との関係で苦勞したこと

設問自体が先生との関係で苦勞することを想定しているように感じられるが、実際の回答には「問題はなかった」、「熱心にご指導していただいた」との記述もあり、「苦勞したこと」の各項目はそれほど高くはないことを確認しておきたい。その上で、「あまり指導してもらえなかった」が以前より減少しているものの全体として1割程度はいる。「その他」で垣間見えた教員の多忙な状況(先生が忙しく、打ち合わせる時間があまりなかった、話しかけるタイミングが難しかった等)と関連していることが想像される。団塊世代の教員は平成26(2014)年から退職期を迎えていることから、近年はベテラン教員が減少し新任教員の割合が増えている状況も影響していると思われる。学生たちには、期待しているような十分な指導がない場合でも、現場の教員の忙しい状況が背景にあることを事前に伝えておくことも必要かもしれない。教員の働き方改革も進められているため、動向を注視し、実習指導に反映させることも求められる。

「あまりに厳しかった」、「そりが合わなかった」は多くはないが以前も近年も一定数はいる。教師も人間なのでいろいろなタイプの先生がいるし“合う・合わない”はどの世界でもある。それでも、(実習生の気分で判断するのではなく)「生徒にとって最善の利益」は何かということ、学校教育の目指すところは何かということに照準を合わせて、(合わない先生とでも)教員全員で共有して取り組む姿勢が優先されることを学生に伝えることが肝要かと思われる。他方、ハラスメントを受けた場合は過度な我慢をすることなく、大

学教員等に相談することも必要である。実習校の教員には敬意と感謝の念をもって接することが基本であり、注意を受けた場合は省察する姿勢が大切である。と同時に、ハラスメントを見極めて適切に対処できる判断基準を養うこと、対応の窓口や組織があることを知識として知っておくことが求められる。事前指導でも押さえておくべき内容である。

5. おわりに

「中等教育実習事前事後指導」で蓄積してきたデータを基に、本学学生の実習実態の一面を明らかにし、「国語」・「書道」、「家庭」の教員免許取得を目指す学生たちの傾向や課題をある程度は見出すことができた。今後の実習指導に少しでも活用できればと願っている。

本論で扱ったアンケート調査の項目は、実習生の感じる困難、苦勞を把握することに重点が置かれていた。その先輩たちのデータを学生に示すことは、学生が実習に一定の覚悟を持って臨むためには有効であると思う。しかし他方で、必要以上に実習を恐れ、緊張をもたらすものにもなっているかもしれない。特に近年の学生はその傾向が強くなっているように感じる。そのため、事前指導の授業で招いている外部講師には実習に向かう心構えとともに「実習を楽しむ」ことも話していただく等の工夫を取り入れてきたつもりである。今後は、事後アンケート調査の項目にも、「授業の観察で特に参考になったこと」、「自身の成長を感じられた場面」など、プラス面の評価を問うものを入れることも考えられる。教員と「そりが合わない」等の選択肢は、教員批判の気持ちを不要に助長する恐れもあるため、再考したい。アンケートの目的も吟味しながら内容を再検討することが今後の課題である。

注

- 1) 教育職員免許法施行規則 第3条（小学校教諭普通免許状）、第4条（中学校教諭普通免許状）、第5条（高等学校教諭普通免許状）に規定されている。
- 2) 教育職員免許法および同施行規則に基づいて全国すべての大学の教職課程で共通的に修得すべき資質能力を示すものとして、平成29年11月に「教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会」（文部科学省）より公表されている。
- 3) 新型コロナウイルス感染症の影響のため、令和2年4月3日の文部科学省通知により教育実習の時期を秋以降に変更すること、卒業年次の学生を優先することが示された。さらに5月1日の通知により教育実習の科目の総授業時間数のうち、3分の1を超えない範囲を大学等における授業により行うことを可能とする特例的な扱いが示された。さらに、教育実習生を受け入れることが困難な学校も少なくないことを見込んで、8月11日に「教育職員免許法施行規則等の一部を改正する省令の施行について」（通知）において、教育実習の科目の総授業時間数の全部又は一部を大学等が行う実習により行うことができること、それによっても対応が困難な場合は、課程認定を受けた教育実習以外の科目で代替できることが示された。
- 4) 当該集計結果の使用については作成者の許可を得ているが、その使用に関する責任は本論の筆者が負うものである。
- 5) 部活動の地域移行：令和4（2022）年6月にスポーツ庁での有識者会議で提言された、公立中学校における休日の運動部の部活動を外部（地域のスポーツクラブや民間企業、スポーツ少年団など）に移行する部活動改革で、令和5年度から3年間を「改革推進期間」として準備が進められている。文科系の部活動についても検討していくとされている。

A Study of the Secondary School Teaching Practice for University Students —Based on an Analysis of Post-Practical Questionnaires of Students Feedbacks—

Mana OHSHIMA

Department of Psychology and Culture, Faculty of Humanities, Kyushu Women's University
1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi, 807-8586, Japan

Abstract

The practical training is essential for the students aspiring to become school teachers, for it enables them to combine theory and knowledge they learn in university with teaching practices they employ at school.

Kyushu Women's University offers the educational curriculum for students to obtain junior and senior high teacher's license to teach Japanese, calligraphy and home economics.

Focusing on the students feedbacks, this paper presents the results of the questionnaire survey on their practical training at secondary schools for several years. Its purpose is to clarify some challenging issues and problems these students might face in the teaching practice at school and to offer helpful information to improve the guidance and coaching for them.

Key Words : secondary education, practical training, classwork, relationship with students, relationship with teachers